

『祖堂集』における接尾辞に関する一考察

A Study on the Suffix of Zutangji

竹田 治美
Harumi Takeda

キーワード： 祖堂集 接尾辞 近世副詞

はじめに

言語は時代の流れとともに変化するがそれにはさまざまな要因が考えられる。すなわち言語の内的要因と外的要因である。時代変化の中、言語の変遷プロセスには時代ごとの特徴があり、音韻・語彙・文法などの変容は均衡的ではない。要するに単純に時代を区分することができない。言語の変遷を究明するには、単に歴史上の変遷の結果を記述するだけでは不十分だと思う。時代におけるそれぞれの地域の言葉とその背景にある要素を考慮しながら、その史的記述の対象となる記述が最も望ましい。

古代漢語の語彙体系は音韻と語法とともに大きく変化した。その研究成果も多く見られる。しかし、古代漢語の語彙体系が多くて複雑であり、その構造や体系内の変化においても不均衡であるため、共時性と通時性を通して記述に対する解釈及び構造、機能の説明及びその変遷の本質を掘り下げた考察が重要である。

古代漢語の副詞も他の品詞と同様に長い間議論が続けられてきた。その中、副詞の接尾辞は一体どのような文法現象に反映されるのか、また、他の品詞の史的な変遷との関連の異同を検討する必要があると考える。

本稿は、副詞における範疇化の過程を明らかにするため、漢語研究において最も信頼できる漢語史資料である『祖堂集』をテキストとして取り上げる。

『祖堂集』は現存する南宗禅燈史最古の完本で唐五代の禅宗思想及び中古・近代漢語の研究に極めて高い価値を有する一次資料である。五代南唐の静・筠の二人の禅僧によって南唐保大10年（952年）に編集された。中国国内で編集されたものの、入蔵されず、高麗に伝わり、高麗の高宗32年（1245年）に大蔵經の蔵外補版として開版された。

『祖堂集』は唐末五代という中古漢語から近代漢語へと推移する時期の音韻、語法、語彙の特徴を探求すべき資料である。『祖堂集』には白話体と文言体が用いられ、俗語・雅言や方言、官話なども多く記録されている。『祖堂集』は晩唐・五代口語の第一次資料として当時の言語状況を反映する貴重な禅宗史書である。

本論は、『祖堂集』における副詞の接尾辞に焦点を合わせ分析し、その使用状況、機能と変遷に考察を加える。なお、テキストとして禅文化研究所影印大韓民国海印寺蔵版『祖堂集』（及び禅文化研究所 基本典籍データベース（ZDB））を用いて、中華書局點校本が校勘・標点本を参照することにする。

1. 接尾辞について

現代語の接尾辞とは、独立機能をもたず、語彙に後置し、元の品詞の意味や機能を変え、派生語を作り、新しい

語彙の意味を補う形態素である。

志村良治「中古漢語の語法と語彙」(1967)は「副詞の複合語化の現象のうち、特に活発に接尾辞化している。語彙にもそれにより大幅に変化を来たす」と指摘する。¹⁾

また、副詞の接尾辞については太田辰夫、王力が早くに見解を示された。

太田辰夫(1957)は、「接辞は助用詞とは同じでない。助用詞は独立性をもたないながらも言語活動における単位である。しかし接辞のばあい、このような分析は言語に対する特殊な省察としておこなわれるにとどまり、これを総合の段階にまでもっていくことができない。ことに注意すべきは、接辞の認定には語原解釈を伴うこと、および用例の多少などにもとづく価値判断が含まれていることがある」と指摘する。²⁾ 近年、接尾辞についての研究が注目されているが、現段階では、接尾辞の起源、明確な機能・特徴などについて未解明な点が多い。研究がまたれる分野である。

中古には接尾辞は副詞のみならず、品詞全体において広範囲に及んで用いられた。例えば名詞・代詞の接尾辞「～頭」、「～子」、「～児」、「～家」なども多く使われ、現代語でも引き続き使用されている。中古には「～其」、「～自」、「～加」、「～然」、「～復」、「～来」、「～是」、「～為」、「也」、「～且」、「～経」、「～焉」、「～而」、「～地」、「～乎」、「～箇」などがある。これらの接尾辞と見られるものは、明白な基準と表示がなく、特徴として実詞的な機能が薄く、語義をもっておらず、前置の辞が語義を表す。また、接尾辞と見られるものは接合力(上接成分との癒着力)が強く、前置詞と接合して一つの語彙になる。さらに多くの接尾辞は名詞、形容詞、副詞などに用いられ、使用範囲が広い。

宋代になると、一部の接尾辞が衰退し、新たなものが登場した。中古に頻用された「～為」、「～復」、「～而」、「～當」の用例が減少し、機能も衰退しつつある。しかし「然」と連用した副詞は、現代語にも存在し、多用されている。

2. 『祖堂集』における副詞の接尾辞について

『祖堂集』にも接頭辞・接尾辞を用いた副詞の二字連用も多く見られる。中古には接頭辞・接尾辞も大量に登場し、語彙の複合化に寄与した。接尾辞を用いる副詞を見ると接尾辞をとまなわな一字の語義の場合と変わらない。またこれらの複音節副詞は使用頻度が低いことが特徴である。つまり中古の接尾辞を用いた副詞は不安定な状態にあることが指摘できる。ただ、これらの副詞がどのような規則で結びついたのか、現段階では解明できてない。

『祖堂集』では、「兒」、「而」、「尔」、「當」、「頭」、「底」、「地」、「復」、「家」、「乎」、「個」、「來」、「流」、「其」、「取」、「然」、「是」、「生」、「相」、「與」、「子」、「自」、「者」などの接尾「為」、「也」、「且」、「在」、「経」などの接尾辞があり、主に付加式構造形式で名詞、形容詞、動詞、副詞に後置する。以下、副詞の接尾辞とするものは「自」、「加」、「然」、「復」、「其」、「来」、「爾」、「地・底」、「箇」、「是」がある。以下一部の例を挙げ、考察を加える。

「自」は中古から発達し、「自」を伴う副詞が大幅に増加した。また、形容詞、助動詞の接尾辞で用いられることも多い。『祖堂集』では「各自13例」、「本自10例」、「独自8例」、「既自3例」、「当自2例」、「常自1例」、「亦自1例」、「忽自1例」、「猶自1例」、「親自1例」がある。

「自」は中古と同様に完全虚詞化しておらず、「親自」、「各自」のような実質的な意味を有するものもある。「自」の接尾辞化について議論が多いが、主に虚詞化されるかどうかについて二つの議論に分かれる。楊栄祥(2002)は、「『X自』の『自』は独立の語彙から虚詞化されてきたから、語源を探ると必ず意味があるはず、しかし、六朝時代からの大量の文例を考察すると、『自』はすでに実詞から分離して、語彙の語義は主にXにあり、『自』は副詞とし

での標識かつ副詞を復音節化の役割を果たしている。これは副詞の接尾辞の定義に準ずるものであり、接尾辞に見なす」と指摘する。³⁾

「加」は中古から接尾辞の機能がもたされた。「加」自体も副詞としての機能をもっていて、主に程度副詞に後置し、さらに程度の変化を強調する。『祖堂集』では「更加2例」、「倍加1例」、「深加1例」があり、「加」は実質的な意味が強く「加」のような実詞の機能をもっている接尾辞が殆どない。

「然」は上古に既に登場し、多用されていた。王力『漢語史稿』(1958)は「『然』は独立語から接尾辞に発展した。このような変遷は英語、フランス語にもある。例えば、-ly、-mentも本来独立語であった。語彙から接尾辞に変遷することは言語の発展過程において一般的なことである。『然』と連用する副詞は最初の頃、語幹は殆ど単音節であったが、戦国時代から『然』に前置する重複形式の形容詞も現れた。例えば、『蹙蹙然、芒芒然』のような形で登場した」と指摘する。⁴⁾

『祖堂集』では「安然」、「忙然」などのような形容詞、「縦然」のような連詞の接尾辞とみられるものもあれば、副詞に後置して接尾辞の役割を果たすものも多く存在する。「雖然45例」、「灼然40例」、「忽然38例」、「自然22例」、「果然10例」、「豁然7例」、「既然6例」、「迴然4例」、「復然3例」、「峭然3例」、「俄然2例」、「倏然2例」、「宛然2例」、「奄然2例」、「居然1例」、「儼然2例」、「必然1例」、「突然1例」がこれにあたる。これらの複音節副詞は「然」を伴わない場合と語義・機能が変わらないが、状態や性質などの表現をさらに生き生きとさせる役割を果たしている。ここに現れた「然」と連用した「雖然」、「灼然」、「忽然」、「自然」、「果然」などの副詞は大量の用例があり、特にその中「雖然」、「忽然」、「自然」、「果然」が『敦煌變文集』にも大量に存在しており、唐末五代には用法も定着していると推測できる。これらのものは現代語にも存在し、多用されている。

また、「兀然3例」、「瞥然3例」、「默然3例」、「喟然1例」、「扃然1例」、「森然1例」、「条然1例」、「炳然1例」、「独然1例」などの用例があり、これらの用例は中古からの沿用であり、活発な用法がないと考えよう。

「復」は中古に広く使用されていたが、『祖堂集』では連詞として「為復22例」の他、「亦復5例」、「不復3例」、「又復2例」、「再復1例」、「更復1例」、「便復1例」、「方復1例」がある。これらのものは主に中古からの延長であり、いずれも活発的に使用されていない。

宋代になるとさらに大幅に減少した。私が考察した宋代語録では「亦復」、「方復」、「不復」の3種類しかない。志村良治『中国中世語法史研究』(1983)は「『～復』は『故、復、自、佳、耳』などと複合する。これも中古初期からにわかに活発化する現象で、これによって語としての独立性をつよめたが、『～復』は接尾辞化してゆく」と述べる。⁵⁾ 中古では「復」は主に同義・類義副詞と複合したものが多く、宋代には完全に接尾辞化し、実質的な語義をもっておらず、宋代以後接尾辞の機能が退化した。

「其」は上古から代詞の接頭辞・接尾辞として用いられた。その後、動詞、形容詞の接尾辞になった。『祖堂集』では「何其1例」のみ見られる。「其」は語義をもっておらず、前置の辞が語義を表す。

・神秀欲爲六代何其天之不從。乃得會大師再立實録、故有功勳。「p68」

「来」は上古から語気詞、助詞に変遷し、虚詞化され、現代語の用法と大きな変化がない。近古に方向補語を示す動詞の接尾辞からさらに発達し、形容詞と副詞の接尾辞の機能が持たされた。『祖堂集』では「本来65例」、「適来55例」、「從來16例」、「元来12例」、「比来6例」、「都来3例」、「前来2例」、「近来1例」、「向來1例」、「渾来1例」、「總来1例」がある。「来」は時間副詞と連用して、時間、状態の継続を強調する。これらの副詞は宋代以後にも強い生命力をもって現代語に至った。

・悟與不悟唯在愚智、然則愚智本來各各不同、説法有何所用。「p743」

・雪峯在身邊侍立。問者箇上座適來辭去幾時再來。師曰只知一去不知再來。「p 234」

・師云師弟元來有這箇身心。若然者不用入山各自分去。「p 199」

「而」は『説文解字』によれば、「而、須也。」という意味である。漢代以後実詞の機能が完全に衰退し、代詞、連詞、語気詞の機能がもたされた。さらに連詞から副詞の接尾辞に変遷した。「然」と同じであったため、中古以後「然」が取って代わった。『祖堂集』では「忽而2例」のみがみえ、「忽然」の使用例が断一に多い。宋代以後にも「忽」、「忽然」の使用がさらに普遍化された。

「地・底」は副詞のみならず形容詞の接尾辞としての機能ももっている。副詞と連用する場合は情態副詞が多い。王力(1958)は『「地」と「底」は同じ語源「之」から変遷、発展したものである。唐宋時代には『底』は形容詞と定語に用いられる。『地』は連綿語に用いられる。例えば、『漫漫地』、『悠悠地』などのようなものであり、これらの連綿語が状語になるため、『地』の副詞と連用するようになった。『底』を『的』に書き換えたのは宋人の話本であった。五四運動以後、漢語の語法は西洋言語の語法の影響を受け、文語では形容詞の接尾辞と副詞の接尾辞を区別し、前者は『的』で示し、後者は『地』で示す。現代語では名詞に後置し、副詞化にさせる」と指摘する。⁶⁾『祖堂集』では「驀地1例」、「特地1例」、「立地1例」、「背地1例」がある。『敦煌變文集』にも「驀地」、「特地」、「立地」、「背地」、「白地」、「忽地」などがあり、主に状語として働く。「底」は「驀底4例」、「忽底1例」、「峭底1例」がある。副詞の他に動詞、名詞、形容詞、数量詞、代詞に後置し、主語、述語、目的語、連体修飾語になる。例えば「徹底」、「沈吟底」、「説底」など広範囲で用いられるが、「地」は主に単音節に伴い、復音節の語彙が見られない。「底」は単音節と復音節の接尾辞となるが、使用頻度が高く、語法的な役割の範囲も広い。接尾辞としての機能と意味の差は見られないが、方言の視点から考察する必要があるかどうか今後の課題にしたい。

・師有時上堂驀地起來伸手云乞取些子乞取些子。「p 432」

・京口談玄已有名、吾山特地涉途程。「p 202」

・師有時上堂驀地起來伸手云乞取些子乞取些子。「p 432」

・昨來到和尚處問佛法輕忽底後生來東石頭上坐。「p 147」

・兩人對坐説話一切後當胸合掌峭底便去。「p 235」

「乎」は上古から感情色彩を表す形容詞の接尾辞としての働きをした。楊榮祥(2004)の考察によれば、副詞の接尾辞としての機能は宋代に登場したという。『祖堂集』に「幾乎1例」がある。しかし、この一例が貴重な例と見られる。楊榮祥(2002)は『「幾乎」の後ろに数量構造がつくため、ここでは形容詞と介詞と見なすこともでき、副詞に見なすこともできる。これは二つの品詞が一つの品詞に発展する過渡用法である」と指摘する。⁷⁾

・遇會昌沙汰避而幾乎五六年、後宣宗中興。「p 347」

「箇」は助詞から接尾辞に発展した。唐代に登場し、『敦煌變文集』に「早箇」のように形容詞の接尾辞に用いられる例文が見られる。また代詞、量詞、動詞の接尾辞として用いられる場合もある。『祖堂集』には「早箇5例」、「好箇1例」がみえる。また、復音節に後置する「明明箇」、「文明箇」、「綿密箇」の用例もあり、形容詞の接尾辞としての「好箇9例」、「妙箇1例」の用例がある。

「早箇」・為言萬古無千攻、誰知早箇化惟塵。(『敦煌變文集』6-722)

次の時代の資料を考察すると「箇」は宋代語録に145例あるが、主に『朱子語類』に偏在する。よって、「箇」は主に南宋に発達したと考えられる。そして宋代以後にも活発に進化し、現代語にも口語表現として頻用される。

「是」について志村良治(1967)は『「是」に関わる接辞化の過程を未だに明確に把握できない。しかし中古から『是』による構成された語彙が激増した。『法華経』、『世説新語』、『遊仙窟』、杜甫の詩などにも多く用いられる。

晩唐五代になると『是』の接尾化の傾向が益々発展する」と指摘する。⁸⁾『祖堂集』では「皆是15例」、「又是14例」、「還是8例」、「却是8例」、「實是7例」、「定是3例」、「応是3例」、「直是2例」、「終是1例」がある。

「相」は実詞から派生したものであり、上古から副詞として発達し、現代にも使用されている。『祖堂集』では「互相2例」、「共相3例」、「遞相5例」がある。これらのもの「相」と伴わない場合と語義と語の性質が変わらないため、接尾辞を見なす。

- ・王以正法治世奉行十善互相崇敬猶如父子。「p11」
- ・父母愕然共相謂曰據斯嘉瑞必得聖子。經於半月知有身因。在胎三十九月方始產生。「p 627」
- ・思和尚曰吾之法門先聖展轉遞相囑授莫令斷絶。「p 147」

おわりに

以上『祖堂集』における接尾辞についてみてきたが、これをまとめると、以下ようになる。名詞、動詞、形容詞、代詞、連詞などを含めて接尾辞の機能は品詞全体に発達したが、副詞の場合は主に中古時代に生産され、継続使用のものが多い。また、接尾辞と比べると、接頭辞のほうが数多く、構造的にも活発しており、広範囲で用いられている。また、記述部分より問答部分に接頭辞・接尾辞の使用が多いとみられる。その原因と背景あるいは機能などについて次回の課題にしたい。

『祖堂集』における接尾辞の全体から見ると、多くの品詞に用いられ、用法も複雑である。また、一つの辞が多種類の品詞に後置して接尾辞の役割を働くものが多い。例えば「是」、「其」、「然」、「自」、「生」、「来」などがそれぞれにあたる。接尾辞には活発と不活発のものが明白に分かれていて、虚化された程度が異なり、殆どの接尾辞が語義をもっていないが、「加」、「復」、「自」は語によって実詞の面影が残っているものもあれば、実詞の品詞機能が強いものもある。

名詞などと異なり、接尾辞化された副詞は、接尾辞と伴わない場合と語義と語の性質が変わらない。副詞の場合は接尾辞自体も元副詞であり、虚詞化されたものが多い。

『祖堂集』における副詞の接尾辞の使用状況をみると、接尾辞の構造形式差異、ここでも副詞全体の発展と同じく内部に差異が認められる。接尾辞の発展は内部において不均衡である。例えば、『祖堂集』においては名詞の数が多く、副詞の数が少ない。内部不均衡の現象は副詞のみならず、上古から近古にわたる品詞全般の特徴である。

復音節副詞の全体が活発に進化していく中、接尾辞は広範囲で使用されるが成長の勢いがとまり、主に「～然」、「～自」、「～地」に集中していることが分かる。

今回行った作業は、『祖堂集』における副詞の特徴を探るための一環に過ぎず、全体像を俯瞰した上で改めて論じたい。

主要な参考資料

- 太田辰夫（1957）『中国歴代口語文』朋友書店
 香坂順一（1967）「近世・近代漢語の語法と語彙」『中国文化叢書（1）言語』大修館書店
 志村良治（1967）「中古漢語の語法と語彙」『中国文化叢書（1）言語』大修館書店
 志村良治（1983）『中国中世語法史研究』中華書局
 衣川賢次（2012）「祖堂集語法研究瑣談」花園大学文学部研究紀要44
 衣川賢次（2013）『祖堂集』の基礎方言 東洋文化研究所紀要164

楊榮祥（2004）『近代漢語副詞的發展』商務印書館

竹田治美（2012）『宋代語録における副詞研究』白帝社

注

- 1) 志村良治（1967）「中古漢語の語法と語彙」『中国文化叢書（1）言語』p 284 大修館書店
- 2) 『中国語歴史文法』太田辰夫 朋友書店 p.21
- 3) 「副詞詞尾源流考察」楊榮祥 『語言研究』2002年第3期 p 68
- 4) 王力（1958）『漢語史稿』p 315 中華書局 1986版
- 5) 志村良治（1983）『中国中世語法史研究』p 92 江藍生・白維国（訳）中華書局
- 6) 王力（1958）『漢語史稿』p 317-322 中華書局 1986版
- 7) 「副詞詞尾源流考察」楊榮祥 『語言研究』2002年第3期 p 72
- 8) 志村良治（1983）『中国中世語法史研究』p 75 江藍生・白維国（訳）中華書局